羽ばたくブロイラー新鶏種

コッブ500Mx

①

ブロイラー経営における安心材料の一つは、性能の安定した優れた鶏種がいつでも入手でき、選べることだが、生き物であるだけに、常に安定した性能を発揮することは容易ではない。こうした中で、種鶏の受精率、ブロイラーの増体性の良さから、改めて関心が高まっているのが『コッブ500Mx』である。種鶏孵化場やローカルインテ、生産農場の関係者に、その良さについて率直な意見を聞いた。

福島エンヤを訪ねて

種鶏の成績も標準上回る

きめ細かな管理が能力を引き出す

福島エンヤの本社

コッブの育種改良元である米国のコッブ・バントレス社はこれまでは、世界標準のコッブ鶏の供給によって、世界各地の需要に十分に応えられるとの考えが強かったように思われる。もちろん、種鶏やブロイラーの成績が抜きんでておれば、多少問題があっても、経済性で選ばれることになるが、現実の世界のブロイラー市場は、経済の発展段階だけでなく、嗜好性など、各地域で多種多様である。日本でもかねて一年にはエイビアン社を傘下に入れ、いろいろな交配を続けてきた。その中で「日本の市場に合った鶏」として輸入発売元の㈱松阪ファーム（大角岩雄社長―三重県多気郡多気町佐伯中一一九―七）が選んだのが『コッブ500Mx』（雌系統はコッブ種、雄系統はエイビアン種）である。

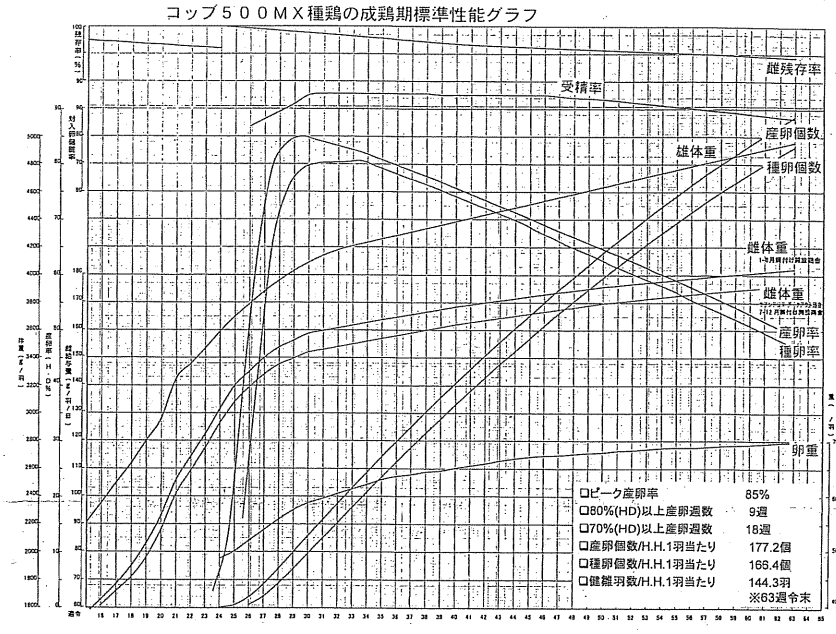
松阪ファームは、二〇〇七年にコッブ500Mxの種鶏を輸入し、同時に輸入したコマーシャルひなの野外試験成績で、初期からの増体能力に優れる方向に転じ、ジーンプールの充実、強健性も改善され、遺伝子を利用した最新の育種改良などに力を入れるとともに、二〇〇八年五月に一一月に東京で開いた日本コッブ会技術部会で同社は、〇七年（平成十九年）十月に導入した輸入種鶏の産卵ピークは八八・二％（三十一週）、八〇％以上持続週は十二週間、七〇％以上持続週は二十週間続き、標準マニュアルを上回った。夏場に産卵ピークを迎えた〇八年三月の輸入種鶏も、産卵ピークは八四・八％（三十週）と、ほぼ標準マニュアル通りの成績になったと報告した。

〇八年（平成二十年）五月に導入した国産種鶏の成績を聞くと、産卵ピークは八七％（二十九週）、八〇％以上持続週は九週間、七〇％以上持続週は二十週間と、標準マニュアルを上回る成績となっている。

コッブ500Mxは、雄系がエイビアン種に変わって、受精率が良くなったと言われるが、標準マニュアルの六十三週齢未受精率は九二・四％、同孵化率は八七・九％となっている。

福島エンヤの最も新しい五十一週齢の群は、受精率九三・九％、対入卵を認めながら、「コッブ500Mxは能力のある鶏であることは間違いない。ただ、年々飼い方も難しくなってきていることから、飼いこなす管理が重要になってきている。これは、ブロイラーの産卵持続性を維持するためには、産卵の状態を見ながら給餌量を減量し、体重をコントロールすることや、雄の配雄率と体重の適正化（体重を下げすぎると受精率の低下につながる）が重要だとアドバイスしている。

福島エンヤでは、十週齢前までに体重の差異を極力少なくするように、三日齢からグレーディングを実施し、四週齢と九週齢では四段階の選別を実施（極小・小・中・大のランク）するほか、十六週齢でも状況に応じて選別している。また、産卵ピーク後の給餌量の減量も、農場ごとに鶏の状態を見ながら行なうなど、きめ細かな管理を実施している。

田家専務は、「コッブブロイラーは、夏場には強いが、冬場は育成率の問題などがあるとして、東北ではこれまで導入を様子見していたインテがほとんどであった。しかし、最近のコッブの高い評価を聞いて、導入したいとするインテも出てきた」と手ごたえを感じている。ただ、ブロイラーについても、「誰もが常に良い成績を出せるものではない。きちんとした管理ができる農場で良い成績が出ている。これは、コッブに限らず、どの鶏にも言えることだ」とし、基本に忠実で、きめ細かな飼育管理がますます重要になっていると強調した。（つづく）

コッブ500MX種鶏の成鶏期標準性能グラフ